

— 今ひとつの傾聴 「^{ほうげ}放下」 —

特定非営利活動法人あおもりいのちの電話

理事長 石川 敏一

こんな話があります。「ある山中で四人の僧が、無言の行をすることになりました。夜になり突然灯明が消えました。一人の僧が下男を呼んで、『油を足せ』と命じます。それを聞いた第二の僧が『無言の行中に声を出すとは何事か』、と叱ります。すると、第三の僧が第二の僧に注意します。『貴公も声を出したではないか』と。最後に第四の僧がいいます。『声を出さぬのはこの俺だけだ』と。……」 無住法師『沙石集』

声を出さぬのは俺だけだ！俺だけが本物だという意識は、誰もが陥る罠のように思えます。どこまでいっても、自分を捨てる真似事すらできないのに、いつも当たりまえのように使っている「傾聴」の言葉が、石臼のようにのしかかってくる。

「しっかり聴こう」と、いつも決心して電話機にむかいます。しかし、いつの間にかしっかり、相手の言葉や口調、内容に無条件に反応している自分がいます。さらに、一度話し始めたら最後、「止めよう、やめよう」と思いながら、時にはそのことにすら気づかずに～、というのはわたしだけでないように思います。

前の話と関連して「放下」という言葉を思い出します。この言葉は、禅語として知られていますが、ドイツの中世キリスト教神秘主義者にとっても重要な言葉でした。自我を開放し、自分自身を神に委ね、心の内に静寂をもつ人を放下している人と言います。

『五家正宗贊』の趙州和尚の章にある話です。あるとき、巖陽尊者という修行僧が趙州和尚に問います。「一物不将来の時、如何—わたしは長い修行の甲斐あって、煩惱妄想を断じ、自己本来の仏性を体得して無一物の消息を得ました。これから先、どのように修行したらいいのでしょうか」。すると趙州和尚が答えます「放下著！」と。自分

の無一物の境界を見てくれといわんばかりの態度を見て取った趙州は、その無一物の境界も捨ててしまえとばかりに、「放下著！」と一喝を浴びせたわけです。それがまだわからない巖陽尊者は「既は一物不将来、箇の什麼をか放下せん—わたしはすでに荷物をも捨て切った無一物の境界です。何もありません。一体何を捨てるとおっしゃるのですか」。趙州和尚は最後に「放不ならば担取し去れ—捨てることができなければ、その無一物を担いで去れ」と。ここで初めて尊者は気がつきます。

自分を退けることに心を配っているつもりでいながら、実は、自分のことだけしか頭にないことがよくあります。自分の価値観に拘泥するかぎり、わたしたちには、共感はおろか、相手の言葉に耳を傾けることすら困難になってしまいます。人がわたしについて考えていることや期待していること、人に認められることやその評価に依存しないとき、わたしたちは初めて傾聴の入り口に立つことができるのではないのでしょうか。聴いているつもりわたし、聴けているはずのわたし、という呪縛からいちど解放される必要があるように思います。

心の奥深いところで、「ゆっくりこの人の話を聴くには、自分の時間があまりにも貴重である」と考え、相手の言おうとしていることが、もう分かっていると考えてしまったり、相手をどこかで軽く考えている自分がいないかをじっくり見つめなおす勇気の必要を感じる昨今です。

それにしてもなんという大雪、コーラーと自分に加え、雪との格闘をしながらの相談員に「脱帽」です。素敵な一年でありますように。「冬来たりなば 春遠からじ」が、当分は信じられないような津軽の、雪、雪、雪・・・・・・・・・・・・・・・・

「疑惑は晴れようとも」

松本サリン事件被害者

NPO リカバリー・サポート・センター理事

河野 義行



2日間で殺人鬼

事件は1994年6月27日に起こりました。私は事件が起こってわずか2日間で、世間から殺人鬼、精神異常者、変質者、いろんな呼ばれ方をしました。というのは、マスコミがそのような印象を与える報道をしたということです。あくまでも印象なんです。断定しているマスコミはないのです。犯人は河野義行とは書いてない。何となくこの人がやったんじゃないかというふんいきの記事を次から次へとだして行く。そのことによって大勢の人が、あの人がやったんだと信じてしまいます。すると、私だけじゃなくて私の周りの人も排除されていくことになっていくわけです。

心の位置を上げる

6月29日、つまりそういう記事が出た翌日から、私の自宅には、無言電話や嫌がらせの電話、脅迫状が殺到しました。家族4人は入院しており、当時高校1年生の長男がほとんど電話を受ける羽目になるわけです。電話番号を変えて欲しいという長男に対し「うちは現実から逃げていたら世間から潰されてしまうぞ。辛いだろうけど、どんな電話に対しても正面から真摯に対応すること、これが大事なことだ」と私は言いました。「人殺し」「街から出ていけ」「税金がもったいないからさっさと自首しろ」などといっぱいきました。しかし、うちは一步も引かなかったんです。そしてそれを通しました。当時の子どもとしては、やはり辛かったです。しかし、その辛いところを自分の力で乗り越えて行った。今は大きなものをいただいたと思っております。あれだけ辛いことを自分たちは逃げずに超えたのだというものが、これから生きていく、ひとつの自信になったと思います。当時、子どもを集めて私は言いました。「お父さんは何も悪いことをしていないんだ。そんな中でこんな嫌がらせがある。それはそっちの人の方が悪いよな。しかしここで大事なことは、自分の心の位置を上げることだ。何を言われても何をされても許してあげる。ここに心の位置をおこうじゃないか」と決めたんです。心の位置というのは、自分の意志で上げることも下げることもできるので

す。圧倒的に不利な状況であっても、許してあげるというのは言えるのです。そして普通に生活していこうということを決めました。結果的にそれが良かったと思います。

事情聴取の果てに

我慢の限界が来ました。「こんな失礼な事情聴取であれば私はもう警察には協力できない。帰らせてもらおう」と言いました。任意の事情聴取だからできるのです。留める理由がないのです。どうしても留めるというのなら、逮捕状を持ってきて、それで執行するしかないです。帰ると言ったら警察は随分慌ててしまい、説得にかかってきました。「河野さんの潔白は、河野さんが証明するしかないんだ。だから事情聴取を続けるように」つまり、「疑われた人は、自分が潔白の証明をしなきゃ駄目なんだ」という言い方です。これは正に今の世の中がそうです。「私は何もしていない、真ッシロだ」と言った時に、マスコミや世間が何て言ってくれたか。「あんたがシロというなら、あんたがシロであることを証明しろ」という言い方をしたり、マスコミは「われわれはあんたに対して、こんな疑惑を持っている。あんたはそれに答える義務があるんだ」という手紙が来るのです。しかしよく考えてみてください。自分が疑われた時、自分の潔白を自分で証明する必要があるのか。法律はそんなふうにはなっていません。疑われた人が潔白を証明するんじゃない。疑った警察・検察が私がやったということを立証しなくちゃいけない。それが法律です。その法律と世の中が逆に動いているということです。何もやっていない人が、何もやっていないという証明をどうやってやるんですか。物も何も存在しないんです、そういう人は。そういう中で世の中が「お前が証明しろ。そして証明できなかったときには、お前はクロだ」という世の中なんです。推定無罪という言葉があります。しかし実際の世の中は、疑われた人がやってないという証明をしなきゃ世の中が納得しないという歪んだ世の中になっているのです。大事なことは原理原則がどこ

にあるのかということを考えることだと思います。

辛い判断

事情聴取に応じるのか、拒否するのかという判断です。拒否するというのは、逮捕に対するきっかけを与えるということです。つまり「早く逮捕されたほうがいいですか、ちょっと後にしますか」と選べと言ったって、両方嫌ですよ。弁護士さんや友人に相談しました。そして結論は、逮捕やむなしです。されてもしょうがない。というのは、任意でこんなに事情聴取を続けたら、私の体がもたない。弱りきった時に逮捕されたら、おそらく、虚偽の自白です。何にもしていないのに、「私がやりました」と多分言ってしまうだろうという判断です。だから、体調不良ということで事情聴取を拒否し、逮捕に備えて準備しました。まず3人の弁護団を組みました。そして、家の全財産を当時、中3高1高2の子どもが処分するかまわないという指示をだしました。

いつ警察が来るか

私がやったという証拠を警察があるなら、いつだって来ます。しかし私は何にもしていない。私がやったという証拠は存在しない。そうすると、証拠で来るわけじゃない、危ないのは世論だと考えました。世の中の大勢の人が松本警察署に対して、「奴をいつまで放っておくんだ」「警察のやり方は生ぬるい。奴をさっさと逮捕しろ」そういう声が大きくなってしまった時が危ないと考えたんです。じゃあ、世論を中立にする方法があるのか。マスコミを使おうということになりました。マスコミはごく普通の会社員をわずか2日で殺人鬼にしたんです。それぐらいの力があるのなら逆にそれを利用しようじゃないか、というのが弁護士さんと私の一致した意見でした。マスコミといってもたくさんあります。そういう中で、科学的に検証をしたいというマスコミを2つ選び、両方にスクープをとらせて、見返りに警察情報をとる。そういう意味では約半年間、警察とこちらの情報戦という状況でした。

流れが変わった

翌年の1月1日。山梨県の上九一色村でサリンの残留物が見つかったという記事がどんとでました。そしてこれを機に、オウム真理教というのが表に出るようになってくるのです。一気に反撃を返しました。2月6日、記者会見を開いて、反省のないマスコミに対しては訴訟の用意がある。裁判を起こしますよと表明する。3月3日、今度は警察に対しての牽制球、これは日弁連に対して人権の救済の申し立てです。日弁連は長野県警に対して警告書を発する

ようにという、申し立てをしました。しかし、状況は依然として平行状態。どっかでバランスを崩さなくちゃいけないということになって、3月20日、地元の新聞社に対して、民事訴訟を起こしました。で、まったく偶然ですけれども、私が民事訴訟を起こしたその日に、東京で地下鉄サリン事件が起こった。つまり、消去法で私は、容疑者から消えていくという状況になったということです。そして、6月12日。長野県警の捜査本部は、公式の場所で、河野氏は松本サリン事件に関与していないということを表明したのです。

やっと被害者に

被害者が1年かかって、やっと被害者になれた、という状況です。自分にとってこの1年間、とてつもない長い期間です。周りがみんな敵という状況の中で、よく潰されなかったなと考えます。何が一番大きかったか考えた時に、意識不明の妻が生きていたということです。もし私が逮捕されてしまった時には、妻は、人殺しの妻なんです。それは、世間がそういうラベルを貼るんです。そしてそんな妻を受け入れてくれる病院や施設は皆無だろうと、当時考えました。そうすると、妻を守ることは、自分が逮捕されないことが最低条件です。妻は意識不明、しゃべることもできないし動くこともできない状況の中でも、そこにいてくれることによって、私や家族をずっと支えてくれたのです。人というのは、生きていくことにやはり価値があるということを妻は教えてくれました。そしてもうひとつ、先ほど言ったように、私は孤立していなかったということです。私の周りの人は、私から離れて行きませんでした。そんな中で特に、私より2回り上の男性が言いました。「1000人の人が1000人、河野はクロだと言ったところで、自分は河野君はやっていないと言うのであれば、自分はそっちのほうを信じる」と。こういう人がいたのです。彼は、最初から最後まで私のことを一度も疑っておりません。そして私のために動いたために、警察は共犯だと刑事さんが付いたのですが、毅然としていました。

皆さん方、これから先、辛いことがあるかもしれませんが。そんな時に、自分のことを100パーセント信じてくれる人を、ぜひ、ひとりつくったらいかがでしょうか。そういう人がひとりいれば、人は孤立しないんです。孤立しないと闘っていけるんです。そんなことを松本サリン事件では教えてくれました。

(9月19日の自殺予防講演から 文責広報委員会)